

HOKPITAL

HOKKAIDO HOSPITAL ASSOCIATION

〒060-0042 札幌市中央区大通西6丁目北海道医師会館内 TEL.(011)231-9900 発行人／徳田禎久

12

2015
DECEMBER
Vol.54

特集

医療経営講演会

平成28年度 診療報酬改定の 方向性

第2特集

平成27年度医療安全管理者養成講習会

法制化された 医療事故調査制度

The Hospital 病院紹介

社会福祉法人恩賜財団済生会支部北海道
済生会小樽病院

心あそびせる時間 — 後志支部推薦 —

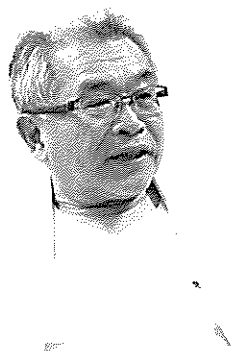
小樽運河クルーズ(小樽市)

← 当院が掲載されました

The Hospital

病院紹介 54

「施薬救療」の精神の上に立ち、
必要な医療が届かない患者を作らないよう
地域包括ケア構築を支える役割を果たす。



院長

近藤 真章 (こんどう まさあき)

昭和46年(1971)札幌医科大学医学部卒業、同大学附属病院整形外科入局。函館厚生院五稜郭病院勤務、済生会小樽病院整形外科医長、同副院長を経て、平成20年(2008)より現職。日本整形外科学会専門医、日本整形外科学会認定脊椎脊髄病医ほか。公職は北海道済生会常務理事、済生会評議員、小樽市医師会副会長、学校法人共育の森学園小樽看護専門学校長など。平成20年厚生労働大臣表彰(救急医療功労賞)受賞。趣味は映画鑑賞とスポーツ観戦。

社会福祉法人恩賜財団済生会支部北海道 済生会小樽病院

地域の理解を重視しながら 新築移転により機能強化

恩賜財団済生会は、明治44年(1911)に明治天皇の提唱により、貧しく医療が受けられない人々を無償で治療する“施薬救療”を目的として設立された。昭和27年(1953)に社会福祉法人となり、全国40都道府県に広がり医療機関、福祉施設など379施設を運営する。現在でも創立の精神は受け継がれ、低所得者を対象とした無料・低額診療事業を各医療機関が行っている。

済生会の北海道における拠点となる施設が、済生会小樽病院である。大正13年(1924)に手宮に小樽診療所として開院。地域からの医療ニーズに従って診療科を増減し、病床規模を拡大させてきた。やがて老朽化・狭隘化のため施設の更新が必要となる。「小樽は坂の町。当院の前施設も敷地内の高低差が2mあり、建築法に従い新病院を建てると許可病床数がまったく収まりません。療養環境の改善、医療技術の高度化への対応といった課題を解決するには広い敷地が必要でした」と近藤真章院長は北小樽から小樽築港へと移転を決めた当時を振り返る。住民には各町内会を回って説明し理解を求め、移転後も北小樽の住民の利便性を図って通院バスを整備した。

平成25年(2013)に新病院が完成。移転と同時に医師の増員に成功し、特に整形外科は6つの専門外来を持つトップレベルの診療の提供が可能となった。神経内科も4名の常勤医を要し、多くの紹介患者を受け入れている。

小樽でできることは小樽で 地域完結のためにリハビリ強化

今後必要とされる機能と位置づけ、強化してきたのがリハビリテーションだ。「小樽市には回復期リハビリを担う病院が市街地から離れた所に1つしかありませんでした。そこで当院も平成20年(2008)に回復期リハビリ病棟を開設しました。需要は多く、リハビリ設備の強化は重要課題でした」と近藤院長。PT、OT、STを増強し、現在は約50名体制で在宅復帰を目指したリハビリを提供している。「地元でできることは地元でするのが、患者さんのためにも付き添う家族のためにもなる」。

職員の自主性を引き出し 病院全体で医療・サービスの向上へ

「この大きさの病院になると、トップダウンのみではできない」と近藤院長が話すように、同院では職員の自主性と活動を促す空氣が強い。職員全員で医療・サービスの質向上を目

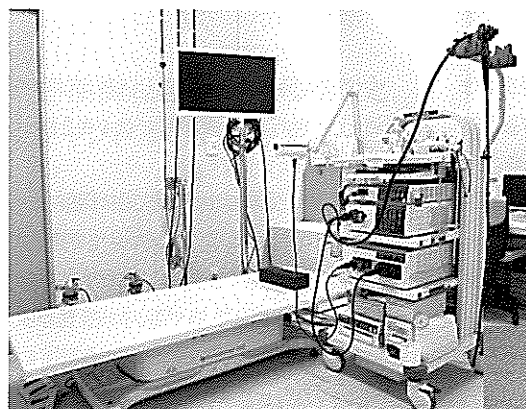


● 移転時に拡充されたリハビリテーション室。理学療法室、和室や浴槽などを備えた作業療法室のほか、病棟にも生活訓練の設備を設ける



指すTQM活動に取り組み、年1回の成果発表会で情報を共有する。また、接遇の優れた職員は、職員からの投票によって接遇者表彰を行うなど、職員同士が評価し合う機会も多い。「新病院になり施設が広くなったことで、職員間にも距離が出ないようにするのは気を配ったことの一つです。会議でコミュニケーションの場をつくる以外にも、サイネージなどを利用してお互いの活動が見えるようにしています」と近藤院長。

それが地域と結びついたのが、栄養管理室の取り組みだ。これまで小樽の行事をイメージした献立などを次々と開発してきたが、さらに小樽ゆかりの石原裕次郎氏が療養中に食べていたという、まき子夫人手作りの減塩食を再現し「石原裕次郎御膳」として患者へ提供。地域で話題となり、レシピ公開も行った。



●日本財団助成事業により超音波内視鏡を含む内視鏡システムを整備

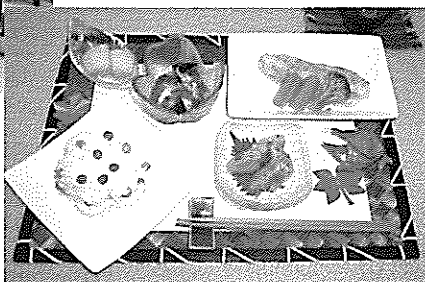
地域包括ケア構築の中で 行き場を失う患者が出ないように

介護療養病床の廃止が迫る中、減る機能を地域全体でいかにカバーしていくかが課題と近藤院長は見据える。「小樽は特養の数が足りないのが一番のネック。私たちには老健があり、さらに移転後は南部地域包括支援センターが入りましたので、要支援、要介護の方の支援は使命と感じます」。

また、急性期病床から出た後、在宅に戻るまでの間の受け皿がないことも地域の課題と話す。「そこで当院の地域包括ケア病棟が役立てばいいと思っています。医療費は関係なしに空いているベッドという感覚で使えるような、現場の人たちに使いやすい病棟にしたい」。開業医とも連携し、より地域に密着した医療と地域包括ケアの実現を目指す。



●自動販売機でチケットを購入し、事前予約なしで当日受けられる「ちょこっと健診」も好評



●栄養管理室が再現した減塩食「石原裕次郎御膳」



社会福祉法人恩賜財団済生会支部北海道 済生会小樽病院

〒047-0008 北海道小樽市築港10番1

TEL 0134-25-4321 FAX 0134-25-2888

■診療科目

内科、消化器内科、循環器内科、神経内科、外科、消化器外科、整形外科、泌尿器科、婦人科、耳鼻咽喉科、放射線科、リハビリテーション科、麻酔科

■病床数

258床（一般病床155床、地域包括ケア病棟53床、回復期リハビリテーション病棟50床）

■職員構成

医師26名、看護師153名、准看護師31名、看護助手36名、介護福祉士6名、理学療法士33名、作業療法士17名、言語聴覚士5名、柔道整復師1名、診療放射線技師8名、臨床検査技師9名、臨床工学技士9名、助手8名、薬剤師13名、管理栄養士4名、MSW4名、事務職その他53名

■沿革

大正13年 7月	済生会小樽診療所開設 (小樽市手宮1丁目6番地)
昭和27年 12月	社会福祉法人恩賜財団済生会支部 北海道済生会小樽北生病院開院
平成14年 10月	社会福祉法人恩賜財団済生会支部 北海道済生会小樽病院に名称変更 療養病床から回復期リハビリテーション 病棟へ変更
平成22年 9月	臨床研修病院(協力型)指定
平成25年 8月	現在地へ新築移転
平成26年 4月	指定居宅介護支援事業所はまなす併設
10月	地域包括ケア病棟(53床)開設
平成27年 4月	地域ケアセンター併設・小樽市南部 地域包括支援センター事業開始

MY FAVORITE

極めた趣味をもっている、自慢したい特技がある、実は鑑定に出したいほどのお宝を持っているなど…。会員病院で働くスタッフの皆さんの話題をどんと集めてご紹介していきます。ぜひ情報をお寄せください!



愛犬と力を合わせ喜び合う ドッグスポーツに夢中です

三上 亨さん

Toru Mikami

地域医療支援課長／

社会福祉法人恩賜財団済生会支部 北海道

済生会小樽病院



三上さんには、我が子のごとくかわいい2匹の愛犬がいます。「夫婦共働きのため、思い切り遊べるのは週末だけ。目一杯運動させてあげたいと思っていた時に、勤められたのがドッグスポーツでした」。ビーグルのマックスにアジリティ(障害物を越える競技)とレトリブ(投げたボールを持ってくる競技)を、ボーダーコリーのアルファにフリスビーを教え、各地の試合に参加。マックスはなんとレトリブの全国大会で優勝するまでに。「犬たちが楽しんでいるかどうか読み取って応えることが上達の秘訣。それが目配り・気配り、察知力の向上につながった気がします」と仕事にも良い影響があったそうです。



音楽が人と人をつなぐ力を 演奏を通して実感しました

竹内 渚さん

Nagisa Takeuchi

リハビリテーション室 言語聴覚士／

社会福祉法人恩賜財団済生会支部 北海道

済生会小樽病院



高校の部活動でアルトサクソに出会った竹内さん。「人と協調して音を作る吹奏楽はそれまで習っていたピアノと違う楽しさがありました」と青春を捧げました。社会人になると、仕事は充実していたものの「気づけば家と職場の往復の毎日。何かを変えたい、もう一度音楽がやりたい」と思いました」と市民バンドに参加。年1回の定期演奏会や地域のイベントで演奏を披露しています。「私の職場で演奏した後、職員数名から『私も昔吹奏楽やってたよ』と声がかかり、それから職場で演奏するときは一緒にやっています」。音楽は竹内さんに新たな出会いをもたらし続けています。



仕事の後にナイターでひと滑り。 シーズンの大半は雪山にいます!

一野 勇太さん

Yuta Ichino

薬剤室 薬剤師／

社会福祉法人恩賜財団済生会支部 北海道

済生会小樽病院



九州出身の一野さんは、冬山とは無縁の生い立ちでした。「北海道に来て友達に誘われるまま、スノーボード一式を揃えていました。最初は四苦八苦でしたが、できないことができるようになってうれしくて、はまって…」今年年間80日以上雪山に通う生活です。「挑戦が好き」という一野さんは、休日には山スノーボードやジャンプにも挑戦。また、体を絞って脚力をつけるため夏はマラソンを始め、100km走ったり、水泳+マラソンのアクアスロン大会に出たりとこちらも本格的に。「仕事が終わって運動をすると、帰ってスッと寝られるので、疲れはたまりません」ととても健康的です!

